２０２４年３月２３日
世界中の日本語教育関係者のためのオンライン交流会

海外の高等教育機関における日本語音声教育
―教師の教育観と指導実態を中心に―

劉 羅麟（リュウ ローリン）
東京大学 大学院工学系研究科 国際教育部門

はじめに

- 日本語教育における音声の重要性
- 学習者の自己実現を支える音声教育（戸田2011、千2017）
- しかし、海外では日常生活で日本語を話す機会が少ない

👉 このような環境で、
日本語教師は音声教育についてどう考え、
学習者にどう指導しているだろうか？

発題者が行った活動

① 37大学100名教師にアンケート調査

② 中国の教育機関へ訪問・見学

③ 発音指導に関する交流活動

※本活動は下記の助成を受けている：

・日本語教育学会 2023年度グローバル人材奨励プログラム

・早稲田大学 特定課題研究基盤形成（2023C-249）

※共同研究者：趙 氷清（遼寧軽工職業学院）、高 千叶（大連海事大学）

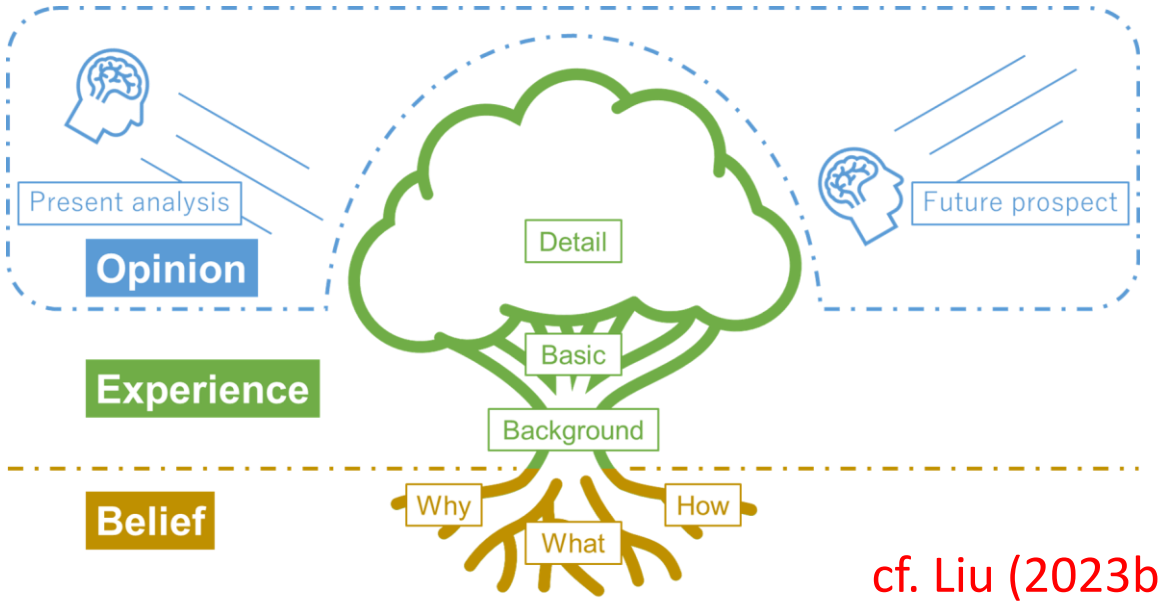
アンケート調査

- 質問項目はLiu（2023)のBelief-Experience-Opinion Model（理念・経験・意見モデル）に基づいて作成：

① B：音声教育観

② E：発音指導経験

③ O：教師自身の意見

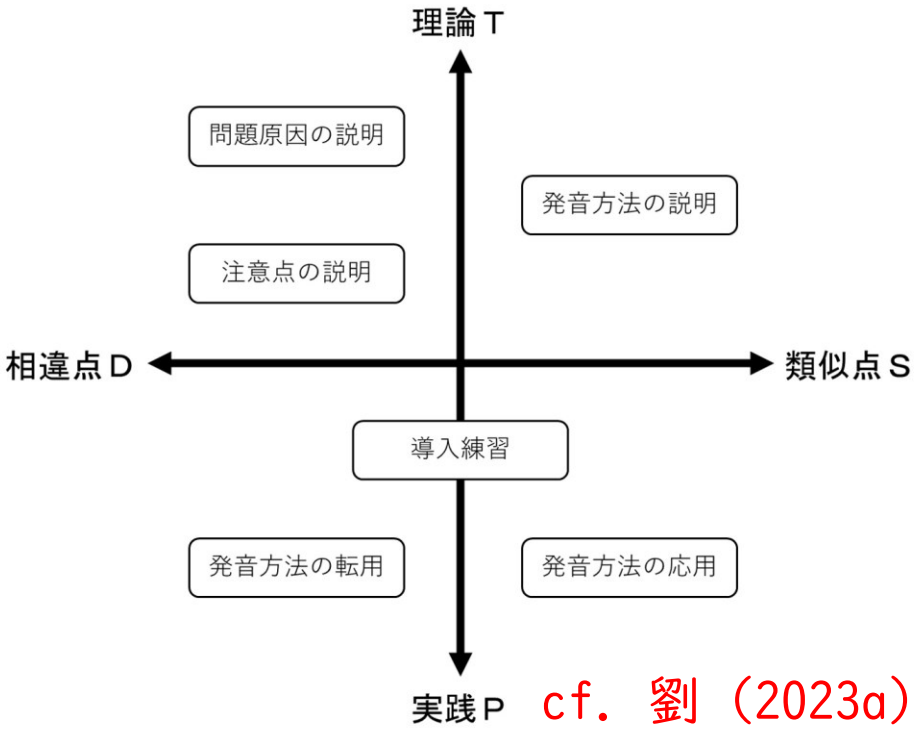


cf. Liu (2023b)

中国の教育機関への訪問・見学

① 成都：日本語学校２校（「祝日計画」「知日塾」）
② 西安：西安外国語大学、西安翻訳学院
③ 南京：南京信息工程大学
④ 上海：復旦大学、上海外国語大学
⑤ 大連：大連外国語大学、大連海事大学、
東北財経大学、遼寧軽工職業学院

発音指導に関する交流活動



cf. 劉（2023a）

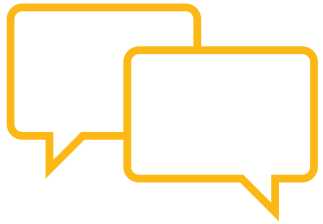
- 日本語教師や日本語／日本語教育専攻の大学院生、計７０名程が参加
- 交流活動の内容：

① 学習者のエピソードから考える音声教育の必要性

② 発音指導の方法や悩みに関する意見交換

③ 母語や母方言を活用した音声教育の理論的枠組み

④ 具体的な指導例や学習者の反応の紹介



交流会で皆様と
意見交換したいこと

37大学の100名の日本語教師を対象とした

アンケート調査の結果に基づいて

海外環境における音声教育

◆ アンケートの結果

- 発音指導の必要性：非常に必要 82%、比較的必要 17%、どちらとも 1%
- 音声の相対的重要度：①音声 2.37 ＞ ②語彙 1.94 ＞ ③文法 1.69
- 音声教育の目標：産出重視 58%、機能重視 15%、知識 14%、意識 13%

◆ 考えたい点

- 音声が一位に順位付けられているのはなぜか

→ 海外なのに？中国だから？指導できていない教師のほうが重要だと？

- 音声教育の目標は「正確／自然な発音」のままで良いか

→ 正確／自然とは何か、標準語か？一律にそれを目標とする必要あるか？

大学の日本語専攻における発音指導

◆ アンケートの結果

- 発音指導科目：総合 74%、聴解 30%、発音 29%、会話 23%、スピコン 15%
- 指導時期：入門期 71%、一年 53%、二年 13%、三年 10%、四年 3%
- 指導すべき時期：入門期 78%、一年 74%、二年 27%、三年 10%、四年 7%

◆ 考えたい点

- 総合科目（精読、基礎日語）と入門期がダントツ、発音授業も少なくない

→ 五十音導入時に集中的に指導、発音に特化した授業も増えてきた？

- 一年目と二年目を通して指導すべきだという意見が急増したのはなぜか

→ 初級段階で基礎を固めるべき？二年に上がっても所期に達していない？

限られた授業時間内で指導する項目

◆ アンケートの結果

- 指導内容：アクセント 96%、リズム 92%、子音 91%、母音 89%、
  イントネーション 86%、ポーズ 70%、プロミネンス 48%
- 指導すべき内容：アクセント 99%、リズム 98%、イントネーション 94%、
  子音 94%、母音 93%、ポーズ 80%、プロミネンス 70%
- 優先順位：リズム＞母音＞アクセ＞子音＞イント ＞＞ ポーズ＞プロミ

◆ 考えたい点

- アクセントの割合が最高だが、日本語のベースであるリズムが最優先か
- ポーズとプロミネンスも指導したいが、後回しになるのはなぜか

発音指導の方法等とその難点

◆ アンケートの結果

- 指導方法：問題指摘 90%、方法伝授 86%、知識解説 76%、シャドーイング 61%、聴覚補助 76%、視覚補助 41%、運動補助 32%
- リソース：通常教材 81%、視聴素材 68%、発音教材 42%、ＯＬコース 24%
- 母語や母方言の活用：様々なアイデアが挙がった（劉2023a, b, 2024参照）
- 指導の適任者：ＮＳ 38%、ＮＮＳ 29%、両者協働 31%

◆ 考えたい点

- 「専門知識が足りない」「言葉で説明しづらい」「指導方法が単調」「教材やリソースが足りない」などの意見が多数、どう解決できるか

ほかに
意見交換したいこと

皆様のほうでご提案があれば

ぜひお気軽に話題提供してください！

主な参考文献

- 千仙永（2017）「日本語音声教育の変遷・課題・展望―日本国内における教師教育に着目して―」『早稲田日本語教育学』22，pp.41-60.
- 寺田昌代（2015）「中国国内の音声教育事情―大学の日本語学科における発音指導―」『言語科学研究 ： 神田外語大学大学院紀要』21，pp.89-99.
- 戸田貴子（2011）「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』9，pp.59-65.
- 中村則子（2013）「非母語話者教師と母語話者教師の発音指導―ベトナムにおけるアンケート調査の結果から―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』39，pp.113-124.
- 劉佳琦（2012）『日本語の動詞アクセントの習得』第六章「東京語の動詞・複合動詞アクセントの教育と学習」pp.181-197，早稲田大学出版部
- 劉羅麟（2022a）「日本語の音声の授業における学習者の母語の活用―学習者が得た知識面・認識面・運用面の学び―」『日本語／日本語教育研究』13，pp.169-184，ココ出版
- 劉羅麟（2022b）「日本語教材におけるナ行音・ラ行音の記述に関する一考察―学習者用教科書と教師用参考書の調査と分析を通して―」『中国語話者のための日本語教育研究』13，pp.78-93.

主な参考文献

- 劉羅麟（2023a）『日本語の音声の習得と教育における母語の役割―学習者の母語と母方言を活用した音声教育を目指して―』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位論文
- 劉羅麟（2023b）「日本語の清音と濁音の指導における中国語方言の活用―受講者の捉え方から見る効果と課題―」『中国語話者のための日本語教育研究』14，pp.49-65，日中言語文化出版社
- 劉羅麟（2024）「学習者の母語を活用した音声特化授業の設計―中国語母語話者を第一歩として―」『早稲田日本語教育実践研究』12，ページ数未定.
- 劉羅麟・趙氷清（2024）「日本語教師の音声教育観と指導実態に関する文献研究―先行研究の質問項目と調査結果の整理―」『早稲田日本語教育学』36，ページ数未定.
- Liu, L.（2023a）A Framework for LI Use in Teaching L2 Pronunciation: Its Construction and Effects. *Proceedings of the Pacific Second Language Research Forum 2023*, p.30.
- Liu, L.（2023b）Beliefs about Speech Education and Teaching Practices of Japanese Language Teachers in Universities across China. *Proceedings of the 13th International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies*, pp.106-111.